

子どもたちの未来のために 研究と診療に全力を尽くす



金沢大学
医薬保健研究域医学系小児科学 教授
和田 泰三氏

- 1992年 金沢大学医学部卒業
- 1999年 米国衛生研究所ヒトゲノム研究所留学
- 2002年 福井県済生会病院小児科医長
- 2004年 国立病院機構医王病院小児科医長
- 2005年 金沢大学附属病院小児科助手
- 2019年 金沢大学医薬保健研究域医学系小児科学教授
- 2020年 金沢大学附属病院周産母子センター長

高度先進医療を提供する金沢大学小児科を率いる和田泰三教授。専門である免疫・アレルギー分野の研究について、また小児科の魅力について、生き生きとした笑顔で語って下さいました。

歴史ある金大小児科 専門グループの力を結集

金沢大学小児科教室は大正4年（1924）に開設されました。もうすぐ100年を迎える伝統ある教室です。免疫・アレルギー、血液・悪性腫瘍、循環器など7つの専門グループがあり、あらゆる小児疾患に対して相互に連携しながら専門的な診療を行っています。

さまざまな疾患に対応しなければならぬ小児科ですが、それぞれの専門性を磨き、総和として難しい疾患に挑んでいくという素晴らしい分野でもあります。他科や地域との連携、福祉や教育などとの関わりも大切です。私たちの仲間は「子どもたちの幸せのために全力を尽くそう」という心意気を持つ人ばかり。元氣になった子どもたちの笑顔が、私たちにやりがいを与えてくれます。

免疫・アレルギー分野の 早期診断や病態解明に注力

私の専門は免疫・アレルギー分野で、主に先天性免疫不全症について

研究してきました。この疾患は多くが遺伝性で、生まれつき免疫が弱い。ため感染症を繰り返したり重症化する、あるいは普段からならない病原体による感染症をおこします。患者は10万人に数人といわれる希少な先天性免疫不全症が知られており、最近では1万人に1人くらいの割合ではないかと考える専門家もいます。

診断は血液検査や遺伝子解析によつて行います。近年、先天性免疫不全症の遺伝子解析が保険適用となり、診断しやすくなりました。治療については免疫グロブリン製剤を投与して免疫力を高めたり、また造血幹細胞移植で治るものもあります。

アレルギー分野では消化管アレルギーの診断や治療にも力を入れています。通常の食物アレルギーは、食後すぐに蕁麻疹や呼吸器症状などが出ますが、消化管アレルギーは食後2時間ほどたってから嘔吐したり顔色が悪くなるといった症状が出ます。食物アレルギーの一種ではありますが、その仕組みはまだよく分かっておらず、診断も難しいのが現状で

す。私たちの研究では、腸に炎症が起けると便中のある顆粒蛋白が増えることが分かっており、これを客観的なマーカーとして診断だけでなく食物制限が不要となる寛解の目安としても用いることができると考えています。通常の食物アレルギーと同じく、原因となる食物を食べなければ症状が生まれませんから、診断することが大切なのです。

患者も医師も輝ける 小児科のチームワーク

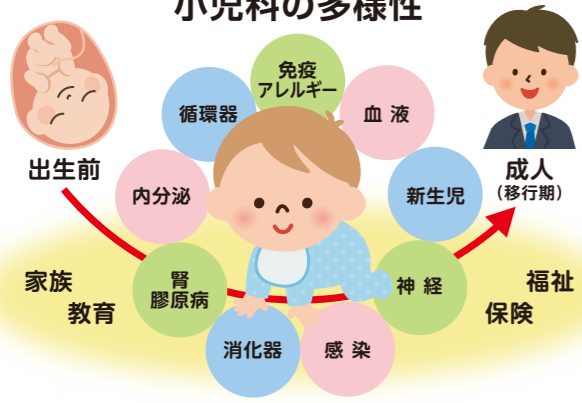
金大小児科には7つの専門グループがあるとお話しました。私は免疫・アレルギー分野で治療法や解析手法を培ってきましたが、実は小児疾患の中には免疫が関わるものも多くあるんです。今後はさらに他のグループとの連携を密にしながら、小児疾患全体を免疫学的な切り口で解析していきたいという思いがあります。

忙しいイメージの小児科医ですが、医局ではワークライフバランスを重視しています。昨年は育休をとった男性医師もいますし、それぞれのライフステージを考慮して医局全体

でサポートする体制が整っています。

恩師に憧れて小児科に入局しました。大学病院には臨床・研究・教育の役割があり、それぞれにやりがいを感じます。臨床では患者さんが元氣になってニコニコと退院していく姿、仲良しになった患者さんとの他愛もない会話が嬉しいですね。また研究では自分たちの発見が患者さんの役に立っていると実感したとき、教育では楽しそうに子どもたちと関わる学生の姿などに大きな喜びを感じます。社会の宝である子どもたちの未来を支えるために、今後も一生懸命に取り組みたいと思っています。

小児科の多様性



幅広い医療と専門性、さらに子どもを支える社会との連携も重要となる